

## 在日中国系留学生に対する ソーシャル・サポートの時間的推移

周 玉 慧・深 田 博 己

(1994年9月9日受理)

Research on longitudinal changes in social support for Chinese students in Japan

Yuh Huey Jou and Hiromi Fukada

The present study investigated the longitudinal changes in social support for Chinese students in Japan. Data obtained from 33 Chinese students were analyzed. The Social Support Scale for Chinese students in Japan (Jou, 1993a) was employed. We considered some factors, such as period of stay, indices of support, areas and types of support. Four different periods were examined—just before arrival in Japan, three months, nine months, and twenty-one months after arrival in Japan. Indices of support included anticipated support, needed support, actual support, the gaps between anticipated and actual support, and the gaps between needed and actual support. Areas of support included academic, human relationships, emotional, and environmental-cultural area. Types of support included tangible, mental, directive and informational type. ANOVA results revealed that the difference of period of stay was not marked, but the differences in areas or types of support, or in the interaction of period of stay and types of support were significant.

**Key words :** anticipated support, needed support, actual support, longitudinal design, Chinese students in Japan.

### 問 題

異文化適応の研究では、適応の状態が時間の経過に伴ってどのように変化していくのかは重大な問題である(山本, 1986; 岩男・萩原, 1988; 高井, 1989など)。異文化での適応を考える際に、滞在国の人々との交流、滞在国の親友の存在などの要因を無視することはできないし、特に、留学生の場合、援助関係やソーシャル・サポートの重要性が指摘されている(Taft, 1977)。ある時期に、ある種のソーシャル・サポートを多く求め、ある種のソーシャル・サポートを多く受け取ったりすることが原因で、適応の状態が時間の経過に伴って変

化していくことは十分考えられる。したがって、適応の時系列的な変化を把握する以前に、ソーシャル・サポートの時系列的な変化を解明しておく必要がある。

本研究のこうした目的を達成するため、サポートの時期、サポートの次元、サポートの領域とタイプといった要因を考慮して、在日中国系留学生のサポートを測定し、検討を加える。サポートの測定時期は、来日直前、来日3ヵ月後、来日9ヵ月後、来日1年9ヵ月後の4回である。サポートの指標としては、来日直前の時点では予期されたサポート、来日後の3時点では必要とするサポートと実行されたサポートを測定し、そして、予期されたサポートと実行されたサポートとの

ギャップ（予期とのギャップ）、必要とするサポートと実行されたサポートとのギャップ（要求とのギャップ）を算出する。サポートの領域やタイプについては、周（1993a）の勉学、人間関係、情緒、環境文化の4領域および物質的、心理的、指導的、情報的の4タイプを使用する。

## 方 法

### 調査対象者

調査対象者は中日交流協会の奨学生66人（台湾出身）であり、4回の調査にすべて回答した33人を分析対象者とした。分析対象者の内訳については、男性15人（45.5%）、女性18人（54.5%）であり、22～25歳15人（45.5%）、26～30歳15人（45.5%）、31歳以上3人（10.0%）であり、既婚者3人（10.0%）、未婚者29人（88.0%）、未回答1人（3.0%）であった。

### 手続き

郵送法を用い、調査票を配布・回収した。

調査を行った時期：①1回目は1992年3月（来日直前）。②2回目は1992年6月（来日3ヵ月後）。③3回目は1992年12月（来日9ヵ月後）。④4回目は1993年12月（来日1年9ヵ月後）。

### 質問紙の構成

質問紙は中国語繁体字版を使用した。

質問紙の内容については、すべて周（1993a）の作成した在日中国系留学生用ソーシャル・サポート尺度の29項目を用いた。

① 1回目の調査：受け取れそうであると予期されたサポートを回答させた。「日本に行ったら、どんなサポートをどのくらいもらえenと思いますか。この『もらえenと思っているサポート』は、主観的にももらえそうと判断できるサポートを指します。従って、あなたが現実を受け取ることが可能だと推測できるサポートをお聞きしたいのです」と質問した。

② 2～4回目の調査：必要とするサポートおよび実行されたサポートを回答させた。これら2測定次元のサポートは周（1994）と同じ形式で質問した。

各質問項目について、「たくさん（もらえそう、ほしい、もらった）」（4点）から「全く（もらえそうもない、ほしくない、もらわなかった）」（1点）までの4段階尺度で評定させ、サポートが多くなるほど高得点になるように得点化した。

周（1993a）の在日中国系留学生用ソーシャル・サポー

ト尺度は、4領域あるいは4タイプから構成され、各領域あるいは各タイプは5～11個の項目で構成されている。本研究は、4領域、4タイプおよび総得点を用い、個人の領域別サポート得点、タイプ別サポート得点は、それぞれの領域、タイプの項目別サポート得点の和を項目数で除した値、すなわち項目別サポート得点の平均を使用した。なお、サポートの総得点は領域別得点やタイプ別得点と対照しやすくするため、29項目のサポート得点の平均を使用した。

## 結 果

領域ごと、タイプごとの予期されたサポート、必要とするサポートおよび実行されたサポートにおける各時期の得点の平均とSDをTable 1に示した。時期1の予期されたサポートと時期2～4の各時期の実行されたサポートとのギャップ（つまり、時期1の予期されたサポートと、①時期2の実行されたサポートとのギャップ1-2、②時期3の実行されたサポートとのギャップ1-3、③時期4の実行されたサポートとのギャップ1-4）、そして時期2～4の各時期での必要とするサポートと実行されたサポートのギャップに関する、領域ごと、タイプごとの得点の平均とSDをTable 2に示した。

必要とするサポート、実行されたサポート、予期とのギャップあるいは要求とのギャップに関する4領域、4タイプ、総得点における時間の経過による変化を捉えるため、それぞれ分散分析を行った。なお、下位検定はRyan法で行い、有意水準はすべて5%に設定した。

### 予期されたサポート

分散分析の結果、4領域間の差が有意( $F_{(3,96)}=4.85, p<.01$ )であり、情緒領域、環境文化領域よりも勉学領域の方がサポートを多く受け取れそうであると予期された。また、4タイプ間の差も有意( $F_{(3,96)}=15.22, p<.001$ )であり、物質的タイプ、心理的タイプよりも情報的タイプの方が、物質的タイプよりも指導的タイプの方がサポートを多く受け取れそうであると予期された。

### 必要とするサポート

時期(3)×領域(4)の分散分析では、時期の主効果( $F_{(2,64)}=5.34, p<.01$ )、領域の主効果( $F_{(3,96)}=16.12, p<.001$ )が有意であったが、交互作用効果は有意でなかった。下位検定の結果、時期4に比べて時期2と時期3の必要とするサポート得点が高く、他の

Table 1  
 予期されたサポート、必要とするサポートおよび実行されたサポートの得点

種類		時期	予期されたサポート				必要とするサポート			実行されたサポート		
			時期 1	時期 2	時期 3	時期 4	時期 2	時期 3	時期 4	時期 2	時期 3	時期 4
領域	勉学		2.53(.36)	3.01(.59)	2.98(.65)	2.75(.63)	2.39(.63)	2.53(.78)	2.34(.55)			
	人間関係		2.35(.56)	2.76(.59)	2.74(.78)	2.48(.66)	2.35(.64)	2.34(.63)	2.28(.69)			
	情緒		2.29(.57)	2.59(.81)	2.57(.71)	2.37(.73)	2.24(.76)	2.34(.83)	2.33(.90)			
	環境文化		2.42(.47)	2.55(.60)	2.48(.59)	2.27(.51)	2.27(.59)	2.32(.67)	2.13(.62)			
タイプ	物質的		2.25(.54)	2.20(.67)	2.19(.67)	1.88(.48)	2.26(.62)	2.32(.67)	2.03(.54)			
	心理的		2.36(.43)	2.88(.64)	2.87(.63)	2.67(.72)	2.34(.69)	2.47(.69)	2.42(.70)			
	指導的		2.51(.46)	3.09(.53)	3.04(.58)	2.85(.57)	2.34(.62)	2.41(.74)	2.33(.62)			
	情動的		2.63(.45)	2.81(.68)	2.71(.71)	2.47(.64)	2.31(.60)	2.32(.67)	2.21(.70)			
総得点			2.41(.42)	2.75(.57)	2.71(.59)	2.48(.54)	2.32(.59)	2.39(.64)	2.27(.59)			

表内の数値は平均，( ) 内の数値は標準偏差

Table 2  
 要求とのサポートのギャップおよび予期とのサポートのギャップの得点

種類		時期	要求とのギャップ			予期とのギャップ		
			時期 2	時期 3	時期 4	時期 1-2	時期 1-3	時期 1-4
領域	勉学		.62(.65)	.45(.87)	.41(.89)	.14(.65)	.00(.85)	.19(.67)
	人間関係		.41(.74)	.40(.87)	.20(.74)	.00(.72)	.01(.79)	.07(.85)
	情緒		.35(.87)	.23(.88)	.04(.77)	.05(.76)	-.05(.86)	-.05(1.04)
	環境文化		.28(.65)	.16(.73)	.14(.69)	.15(.65)	.10(.72)	.29(.76)
タイプ	物質的		-.06(.69)	-.13(.76)	-.14(.63)	-.02(.73)	-.07(.75)	.22(.71)
	心理的		.54(.80)	.40(.81)	.26(.77)	.02(.72)	-.10(.78)	-.05(.83)
	指導的		.74(.68)	.63(.83)	.52(.76)	.17(.69)	.10(.83)	.18(.72)
	情動的		.50(.62)	.39(.75)	.26(.88)	.32(.58)	.31(.77)	.42(.83)
総得点			.43(.62)	.32(.73)	.22(.70)	.09(.62)	.02(.72)	.14(.73)

表内の数値は平均，( ) 内の数値は標準偏差

3領域のサポートよりも勉学領域のサポートが多く求められ、環境文化領域のサポートよりも人間関係領域のサポートが多く求められていた。

時期(3)×タイプ(4)の分散分析では、時期の主効果( $F_{(2,64)} = 5.98, p < .01$ )、タイプの主効果( $F_{(3,96)} = 84.63, p < .001$ )が有意であったが、交互作用効果は有意でなかった。下位検定の結果、物質的タイプ、情動的タイプ、心理的タイプ、指導的タイプの順に求めるサポートの得点が高いことが示された。

必要とするサポートの総得点に関しては、分散分析の結果、3時期間の差が有意( $F_{(2,64)} = 5.48, p < .01$ )であり、時期4に比べて時期2と時期3の必要とするサポート得点が高かった。

#### 実行されたサポート

時期(3)×領域(4)の分散分析では、主効果も交互作用効果も有意でなかった。

時期(3)×タイプ(4)の分散分析では、タイプの主効果( $F_{(3,96)} = 4.99, p < .01$ )および交互作用効果( $F_{(6,192)} = 3.24, p < .01$ )が有意であった。下位検定の結果、物質的タイプよりも心理的タイプ、指導的タイプのサポートを多く受け取っていた。交互作用における単純主効果の検定結果、物質的タイプで時期による変化がみられ、時期4よりも時期2と3で物質的タイプのサポートを多く受け取っており、また、時期4でタイプ間の差がみられ、物質的タイプよりも他の3タイプのサポートの方を、情動的タイプよりも心理的タイプのサポートの方を多く受け取っていることを示した。

実行されたサポートの総得点に関しては、分散分析の結果、3時期間に有意差はみられなかった。

#### 予期とのギャップ

時期(3)×領域(4)の分散分析では、主効果も交互作用効果も有意でなかった。

時期(3)×タイプ(4)の分散分析では、タイプ的主効果( $F_{(3,96)} = 10.54, p < .001$ )および交互作用効果( $F_{(6,192)} = 3.24, p < .01$ )が有意であった。下位検定の結果、他の3タイプよりも情動的タイプの方がギャップが大きい。交互作用における単純主効果の検定結果、物質的タイプで時期による変化がみられ、時期1-2と時期1-3よりも時期1-4の方が物質的タイプのギャップが大きい。また、時期1-2、時期1-3、時期1-4のそれぞれにタイプ間の差がみられ、時期1-2では、物質的タイプ、心理的タイプよりも情動的タイプの方がギャップが大きく、時期1-3では、他の3タイプよりも情動的タイプの方がギャップ

が大きく、時期1-4では、情動的タイプのギャップが最も大きく、心理的タイプのギャップが最も小さかった。

ギャップの総得点に関しては、分散分析の結果、3時期間に有意差はみられなかった。

#### 要求とのギャップ

時期(3)×領域(4)の分散分析では、領域の主効果( $F_{(3,96)} = 6.70, p < .001$ )のみが有意であり、情緒領域、環境文化領域よりも勉学領域の方が要求とのギャップが大きかった。

時期(3)×タイプ(4)の分散分析では、タイプの主効果( $F_{(3,96)} = 37.59, p < .001$ )のみが有意であり、指導的タイプの要求とのギャップが最も大きく、物質的タイプの要求とのギャップが最も小さかった。

要求とのギャップの総得点に関しては、分散分析の結果、3時期間に有意差はみられなかった。

## 考 察

本研究は、在日中国系留学生のソーシャル・サポートが時間の経過によってどのように変化していくのかを解明することを目的とした。4回の縦断的調査を行い、その結果を分析したところ、以下のようなことが明らかとなった。

時期要因に関して、必要とするサポートのみで、時期による変化が示され、サポートに対する欲求は時期4で弱くなっていた。その理由は2通り考えられる。1つは、留学生が時期2・3に比べて、何とか1人でやっていけるようになってきて、サポートを求める量が減少していった可能性がある。もう1つは、いくら多く求めても実際にそれほどもらえなかったので、あきらめてしまった可能性がある。しかし、そのほかのサポートの指標に関しては、時期による変化はなかった。サポートの受け取る量にも、求めるほど受け取らなかったというギャップ、ないし予期とのギャップにも時期による変化がなかった理由の1つは、留学生の日本での対人関係が表面的で進展と変化に乏しく、日本という環境に入り込んでいないのではないかとこの可能性が推測される。

サポートの領域要因に関して、予期されたサポート、必要とするサポート、および要求とのギャップで、領域間の差異が示された。勉学領域のサポートは、最も多く受け取れそうであると予期されるし、最も多く求められているが、求めるほど受け取っていないというギャップが最も大きかった。周(1994)は、在日中国系留学生に対する必要とするサポート、知覚されたサ

ポート、実行されたサポートの関係をサポートの領域あるいはサポートのタイプによって検討し、留学生が勉学領域のサポートを最も求めており、実際にも最も多く受け取っていることを報告した。また、留学生と日本人学生におけるサポートの比較を行った周(1993b)は、留学生が勉学領域では他の領域よりも、必要とするサポート、実行されたサポートないし要求とのギャップの量が多いことを指摘した。本研究では、実行されたサポートに関する領域間の差異は見られなかったが、必要とするサポートあるいは要求とのギャップに関する領域間の差異は、周(1993b, 1994)の結果と一致することが示された。留学生にとって勉学領域における目的の重要度が最も高い(山本, 1986)ため、勉学領域のサポートを多く求めたり、要求とのギャップを大きく感じるようになったと解釈される。

サポートのタイプの要因に関して、すべてのサポートの指標で、タイプ間の差異が示された。情報のサポートが最も多く受け取れそうと推測されていた。これは、出国前の留学生が自国での経験に基づいて予期したものであり、日本に行ったらきっと自国と同様に多くの情動的サポートがもらえるであろうと期待していたかもしれない。しかし、来日後、必ずしも情報を多く受け取っていないので、予期とのギャップが最も大きくなったと考えられる。また、来日後、留学生が指導的タイプのサポートを最も多く求め、実際に多く受け取れたが、まだ不足であるように感じている。こうした結果も、留学生が指導的タイプや心理的タイプのサポートを多く求め、多く受け取り、ないし要求とのギャップを大きく感じている、という周(1993b)の結果とかなり一致している。領域間の差異からみても、タイプ間の差異からみても、在日中国系留学生が特に勉学を重視しているといえよう。

時期要因とサポートの領域要因との交互作用に関しては、1つも有意な効果が見られなかった。時期要因とサポートのタイプ要因との交互作用に関して、物質的タイプのサポートは、時期2・3に比べて時期4では受け取った量が少なくなり、それゆえ、予期とのギャップも大きくなった。留学初期の段階で留学生は、日本の生活にまだ慣れていないので、どんなタイプのサポートもほぼ同じ量で受け取ったが、慣れてくるにしたがっ

て、他の人との接触が多くなり、関係の質も深まるので、有形な物質的援助よりも他の無形な援助を多く受け取るようになったのかもしれない。

このように、4回の縦断的調査で検討した本研究の結果から、予期されたサポート、必要とするサポート、知覚されたサポート、予期とのギャップ、要求とのギャップに対して、時期要因の主効果は顕著でないが、サポートの領域による差異、サポートのタイプによる差異、あるいは時期によるサポートのタイプに関する差異が示唆された。今後、時間的経過によって、サポートが在日中国系留学生の適応に及ぼす影響はどのように変化していくのかが、課題として取り上げられる必要があろう。

## 引用文献

- Furnham, A., & Bochner, S. 1986 *Culture shock: Psychological reactions to unfamiliar environments*. London: Meuthen.
- 岩男寿美子・萩原滋 1988 日本で学ぶ留学生: 社会心理学分析 勁草書房
- 周 玉慧 1993a 在日中国系留学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み 社会心理学研究, 8(3), 235-245.
- 周 玉慧 1993b 在日中国系留学生と日本人学生におけるソーシャル・サポートの比較 広島大学教育学部紀要, 第1部(心理学), 42, 63-69.
- 周 玉慧 1994 在日中国系留学生に対するソーシャル・サポートの次元——必要とするサポート、知覚されたサポート、実行されたサポートの間の関係—— 社会心理学研究, 9, 106-114.
- Taft, R. 1977 Coping with unfamiliar cultures. In N. Warren (Ed.), *Psychology*. Pp.121-153. London: Academic Press.
- 高井次郎 1989 在日外国人留学生の適応研究の総括 名古屋大学教育学部紀要, 36, 139-147.
- 山本多喜司(代表) 1986 異文化環境への適応に関する環境心理学的研究 昭和60年度科学研究費補助金研究成果報告書.